

【試し読み版】



1

【第 I 卷第 4 章】

4

ジンプリチウスの宮殿は占領され、略奪され、破壊される。そして兵隊たちがあさましくも暴れつづける



Postellet seines Adels Zier
Und Stamm-Haus, recht der
Simplex hier
Den Groß-Einbildungs
Barren für.

平和を愛する読者よ。わたしはもともと、あなたをこの騎兵たちとともに、〈トトさま〉の家屋敷のなかまで案内しようなんてことは考えていなかった。やがてここでとても悲惨な出来事が繰りひろげられるからである。しかしこの物語を始めてしまった以上、事の流れとしてその話もきちんとしておかなくてはいけないようだ。それによって親愛なる後世の人びとには、このドイツの戦争⁽¹⁾で、何度かのみわめて戦慄すべき事態が生じていたのだと知ってもらうことができるだろう。また何より、この邪悪なものがすべて、実は至高なる神の善意にもとづき、しばしば必然の定めとしてわたしたちに課されるしかなかったのであり、そしてそれによってこそわたしたちは有益なものに与^{あずか}ること

ができたのだということ、わたし自身の实例をもとに証明することができらう。

なぜなら読者よ、兵隊たちが〈トトさま〉の家を滅茶苦茶に壊した後、わたしはこの兵隊たちに捕えられて世間の人びとのなかへ放り出され、そこであれこれの経験をつつぷりとさせられることになるのだが、もしこのすべてが起きていなければ、そもそもわたしは、天に神がおられるということ自体を、誰かに教えてもらうことはできたのだろうか。そもそもこの世には、〈トトさま〉と〈カカさま〉とこのわたし、そして家の何人かの召使いしか存在していないのだと、ついこの前まで本気で信じていたわたしは、もっと新しい知識を得ようなどと微塵も思うことがなかった。

なぜなら毎日出入りする自分の家のほかに、そもそも人の住む家というものを見たことがなく、ゆえに他の人間というものもからきし目にしたことがなかったのだから。まあ、それからまもなくして、人間はこの世にやって来る前のふるさとがどこなのかということ、そして人間はまたこの世から出ていかなばならないということ、身をもって知る定めとなるのではあるが。つまりその頃のわたしは、姿かたちだけは人間、名前だけはキリスト教徒の子どもであったとはいえ、それ以外の点では一匹の獣にすぎなかったのだ。それでも至高の神は、わたしの無知と無邪気をやさしい憐れみのまなざしで見つめ、神とわたし自身とを認識する道へ導いてくださったのである。その道がどんなところ

を通つていくかについて、神は幾千もの形を用意しておられるはずだが、神はわたしのために、まさにこの一つの道を用いてくださつたのにちがいない。つまり、わたしの教育をぞんざいなものにした廉で、〈トトさま〉と〈カカさま〉が罰をうけるといふ道であり、そしてこれが世の人びとの例ためしとなることを望まれたのである。

騎兵たちはまず自分の馬を小屋に入れると、それからめいめいが珍妙な作業にとりかかつていったが、これはまったくの滅びと荒廃をもたらすものでしかなかつた。つまりある者たちは肉を切り、茹で、焼きはじめたのだが、それはまるで愉しい祝宴でも始めるかのようで、一方、別の兵士たちは、家のなかを隅から隅まで荒らしまわり、かの〈隠

れの間⁽²⁾である小室にさえも、まるでコルクスの金羊毛⁽³⁾が隠してでもあるかのごとくに、威勢よく乱入していった。他の者たちは布や衣装や、ありとあらゆる家財道具をかき集めて大きな荷物をつくり、どうやら今から蚤の市でもおっぱじめるつもりらしかった。そして騎兵たちは、かつさらっていく気のないものは徹底的に打ちこわし、羊も豚も次つぎと刺し殺したうえに、あたかもまだそれでは剣を使い足りないとはかりに、干し草と藁の山に剣を突き立てたり、また布団を破って羽毛を投げ散らかしたりしては、そこにベーコンや燻製肉や家財道具などをぶち込むのだった。そうすれば、布団の寝心地もずっと快適になるでしょうと言わんばかりにである。また他の兵士たちは、暖炉と窓を

こなごなに打ち壊していったが、これはたぶん、これから
厳しい冬の季節は永遠に来ることがないのだよと、ご親切
に教えてくれるためだったのだろう。

兵士たちはまた銅や錫の皿をぺしゃんこに叩き潰し、折
れ曲がってだめになった品をかき集めて袋に入れた。屋敷
にはちやんと何棚もの薪がたっぷり貯えてあるのに、兵士
たちはなぜか寝台やテーブル、椅子やベンチに火をつけて
燃やした。また連中はどうやら焼肉が大好物なので、焼き
串のほかは要らないと思ったのか、あるいはここでとる食
事は一回だけだのお考えだったのか、鉢物や皿はすべて
真っ二つに割られた。そして家畜小屋では、わが家の女中
が凌辱をうけ、もはや外に出てくることはなかった——こ

んなことを書かねばならないのは、まことに情けない、やりきれないことなのであるが。また縛って地面に転がされた下男は、口に材木をつつこんで塞がらないようにした喉のなかへ、乳絞りの桶にたっぷり入った糞尿のおぞましい水を流しこまれた。騎兵たちによれば、これはへスウエーデン・カクテル」という名の飲み物であるらしい。こうして抵抗できなくさせられた下男は、一部の騎兵たちから、おまえが内緒にしている場所を教えろ、今すぐにそこへ連れて行けと指示をされた。こうして連中は、外に隠れていた人間と家畜を捕え、わが家の屋敷に連れてきた。そのなかには「トトさま」と「カカさま」、そして娘のウルゼレの姿もあった。



すると騎兵たちは、ピストルの火打石を取り出し、そこに百姓たちの親指を差しこんで絞り上げ、この哀れな人びとに拷問を加えはじめた。あたかも魔女の火炙りの刑のよ
うな光景であり、実際に、捕われの百姓たちの一人はさつ
そくパン焼き窯に投げこまれ、火を付けられた。その百姓
はまだひと言も、無実の告白を済ませていないのである。
またある百姓は頭のまわりに綱を巻きつけられ、棍棒を使
つてぎゅうぎゅうと絞り上げられたので、口と鼻と両の耳
から血が迸り出た。要するに騎兵たちは、それぞれに百姓
たちを苦しめる特別なアイデアを競い合い、そして百姓
たちのほうは、それぞれに特別な責め苦を受けることにな
ったのである。ただ〈トトさま〉だけは、その時のわたし

の印象によると、一番の果報者であるようだった。なぜか
といえ、ほかの百姓たちが苦痛に苛まれ、阿鼻叫喚のな
かで口ばししていたことを、〈トトさま〉はげらげらと笑
いながら白状していたからである。この名誉は、〈トトさま〉
が一家の長であることに由来していたのにちがいない。騎
兵たちは〈トトさま〉を炎のそばに転がし、手足の動かぬ
ように縛り上げてから、足の裏に濃い塩水を塗った。そう
すると我が家で飼っていた年寄りのヤギが、それをぺろぺ
ろと舐めはじめ、という趣向であった。そのくすぐった
さは途方もないもので、笑いすぎた〈トトさま〉は体が破
裂しそうなほど。たいそう楽しそうな様子を見て、わたし
は〈トトさま〉のお伴をしようと思ひ、またそもそも事情



がさっぱり呑みこめていかなかったせいもあって、一緒にひたすら心底からの大笑いを放ちつづけた。このげらげら笑いのさなかに、〈トトさま〉は兵隊たちに自分の非を認め、隠された宝物の在りかを白状した。黄金や真珠、そしてありとあらゆる宝石から成るその宝物は、ふつうの百姓からはおよそ想像もできないほど豊かなものだった。

捕えられた人妻たち、女中、うら若い娘たちがどうなったかについては、わたしは特に何もお伝えすることができない。兵士たちが女たちをどう扱ったのか、その様子をわたしは見せてもらえなかったからである。わずかに覚えていることといえば、女たちが物蔭から、何度もひどく激しい、哀れな叫び声をあげていたこと、それだけである。わ

たしの〈カカさま〉とウルゼレも、それと大差ない思いを
させられたにちがいない。今となつては、そう想像するだ
けである。そしてこの悲惨のさなかに、わたしはただひた
すら肉の串を回転させて焼肉をこしらえ、午後には家畜小
屋の馬たちに飲み水をやった。そのおかげでとうとう小屋
に入ることができたとき、わたしはわが家の女中(4)に会うこ
とができたのだが、それはもはやあの女だとは分からない
ほど、まったく信じられないようなぼろぼろの姿に変わり
果てていた。弱々しい声で女中は言った。「ああ、ぼっち
やん、早くここからお逃げなされ。さもないと騎兵どもに
連れて行かれちまうよ。どうか気をつけて、逃げきつてお
くれ。よくわかつたらうがね、なんてひどいことが――」

女中はその先を言うことができなかつた。

〔訳註〕

(1) この小説の大枠となっている三十年戦争（一六一八—一六四八）のこと。ドイツを主たる戦場として周辺各国が軍隊を派遣し、史上稀にみる甚大な被害を生んだ。当初はキリスト教の教派間の対立を火種として始まったが、やがて宗教的な問題に限定されない、国際政治の複雑な利害関係を反映した戦争に変わってゆく。

(2) 便所のこと。

(3) 英雄イアソンが勇者たちとともにアルゴ船に乗り、コルキス島のマルス神の神苑へと向かう旅に出た古代ギリシャ神話の物語のなかで、彼らが奪いとらんとした黄金の羊毛皮のこと。

(4) すぐあとのI—8章では「アン」という名前で呼ばれている。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その①

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>